
電車事件

My Tamtyan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車事件

【コード】

N0218V

【作者名】

My Tamtayan

【あらすじ】

地獄行きの列車なんて無い、っと思っていたが有った・・・。
制限時間は2時間・・・。
果たして現代に帰れるか？
帰れなかったら死が待っている・・・。

車内の異変（前書き）

初投稿です。

よろしくお願ひします。

車内の異変

ぼくがここに生まれて意味が有ったのだろうか？
教えてほしい・・・。
すべて終わった今、これだけ言える・・・。
こんな世界間違ってる・・・。

1999.4.22

ぼくの名は高田健二・・・。
まだ入学直後で友達も居なかった・・・。
でも岡田慎吾って言う友達が出来た・・・。
でもこの事件をきっかけに終わった・・・。
ぼくらは遅くまで学校に居た。
そして帰る準備をしていた。

慎吾「早くしろ」

健二「分かってるよ」

慎吾「あゝイライラする」

ズデン

健二「わっ」

慎吾「何やってんだよ」

先生「お前ら早く帰れ」

2人「わわっ」

何とか切り抜けた・・・。

慎吾「急げーーーーー!!!」

駅に何とか着いた。

同級生の宮田和美って子が居た。

和美「あ、健二君じゃん」

健二「わわっ!!宮田さん」

慎吾「何だ彼女か？」

健二「違うよ、同級生だよ」

和美「ひさしぶり」

慎吾「バカかお前。嫌なら嫌って言えばよ。たかが女だろ」

健二「うわ！バカ」

パソコン

慎吾「ぎゃーす」

和美「失礼しちゃうわね」

アナウンス「間もなく、2番乗り場に三沢行きの特急が4両編成でまいります。停車駅は、東大和町、西大和町、高村、松村、神山、東神山、三沢です。黄色い線の内側までお下がりください」

和美「電車来たみたい」

慎吾「どこで降りるんだ？」

和美「神山。そっは？」

慎吾「俺は高村」

和美「へ〜」

ぷしゅー

この時は気が付かなかったが、この列車は地獄への入口へ連れて行く電車だと……。

ガタンガタン

和美「毎日この時間？」

健二「そうだけど」

アナウンス「次は西大和町お忘れ物の無いようにお降りください」

キー

ぷしゅー

この西大和町さえ無かったら……。
そうつくづく思う……。

男「うわ！！何でだよ？何で外に出れない？」

プシュー

ドアが閉まった……。

アナウンス「次は、地獄、地獄」

一同「!?!」

慎吾「何なんだよ!?!」

車掌「みなさん落ち着いてください」

男性「落ち付けるか!?!」

車掌「運転席に行つてきます」

ガラ

しばらくして……。

車掌「うわーーーーー」

一同「!?!」

健二「何だ?」

和美「健二君、あれ」

健二「えっ?」

宮田さんが指さした方向を見た。

健二「うわーーーーー」

女子高生「何なのよ

キャーーーーー」

外にはあの車掌さんの首が吊るしてあった。

そして30分後

やっとみんなが口を開けた。

男性「とにかく自己紹介をしとこうぜ

俺は山本崇」

女子高生「私は西大和高校の内田楓です。」

男「俺は谷口康太郎」

健二「ぼくは大和工業高校の高田健二です。」

慎吾「同じく大和工業高校の岡田慎吾です。」

和美「大和商業高校の宮田和美です。」

一番頼れそうなのは楓さんと崇さんだけだ……。

楓「そうだケータイ」

健二「あっ!?!」

慎吾「ダメだ圏外だ」

康太郎「俺も」

健二「ぼくも」

楓「私も」

和美「私も」

崇「俺もだ」

その時だった。

パリーン

崇「何だこいつ!？」

康太郎「どけ」

シュツ

シュツ

シュツ

ズシャー

化け物が死んだ・・・。

康太郎「危なかったな・・・。」

崇「ナイフはどれだけ持ってる」

康太郎「1人1つづつある」

楓「げっ!!」

慎吾「ス、スゲー」

和美「ダメよ、私こんなの使えない・・・」

楓「私も」

健二「ぼくも」

崇「でも今はもつしかないんだ。」

健二「分かったよ」

車内の異変（後書き）

かなりグダグダに成りましたが、これからもよろしくお願いします。

登場人物

高田健二 16歳

K e n j i T a k a d a

大和工業高校自動車科1年生。
電車で事件に巻き込まれる。
弱虫だが絶対に泣かない。
この事件の主人公。

岡田慎吾 15歳

S h i n g o O k a d a

同じく大和工業高校電気科1年生。
とても元気で明るい性格。
でも・・・その性格がトラブルに成るのがしばしば・・・。

宮田和美 16歳

K a z u m i M i y a t a

大和商業高校商業科1年生。
とても優しい性格で気が弱い・・・。
健二とは中学の同級生で、友達。

内田楓 17歳

K a e d e U t i d a

西大和高校普通科2年生。

とても気が強く、頭がいい。
電車に乗ったら事件に巻き込まれる。

山本崇 22歳

Takeshi Yamamoto

警察学校生。

普通の乗客だが、警察官の学校へ通ってる。
全員には警察学校生のことを隠している。

谷口康太郎 36歳

Koutaro Taniguni

職業不明

しかし何故か軍隊のナイフを持っている。

化け物（前書き）

2話目です。

よろしくおねがいます。

化け物

あれからどれくらい経っただろう。
いや、1時間も経ってないだろう。
それにしても、ここはどこだろう。
そんなことを思い出した時だった。

ガシャーン

慎吾「何だこいつ!？」

崇「鋭い爪が有る」

その化け物は簡単に爪で人を殺すことが出来そうな化けものだった。
康太郎「やるっきゃないな」

シュツ

シュツ

シュツ

崇「何やってんだ!!」

お前らもやれ!!」

和美「こんなの使えません」

健二「危ないし」

慎吾「今は自分の身は自分で守らなきゃいけないんだ!!」

楓「そうですね」

シュツ

シュツ

その時だった。

健二「逃げた!!」

崇「何だったんだ?」

慎吾「何だこれ?」

ピカーーーーーー

慎吾が手にした物が突然光った。

慎吾「うわーーーーっ」

健二「慎吾!!」

慎吾(？)「ふふふ

やあ諸君」

崇「何だ？

お前奴らの仲間だったのか？」

慎吾(？)「いや

私に彼の体を借りただけだ

名前はアンビルト」

健二「アンビルト？」

アンビルト「ここがどこの世界か知りたいか？」

和美「勿論」

アンビルト「ならいいだろう

ここは私が作りだしたパラレルワールド」

楓「パラレルワールド？」

康太郎「なめてんのか？コラ」

アンビルト「分らんか？

まあいい

ここを脱出するには私に勝ってからだ」

康太郎「何？」

アンビルト「ここは私の世界なのだ」

和美「なるほど・・・。

納得」

崇「納得スナ」

アンビルト「最前車両で待っている

以上だ!!」

慎吾「死ぬかと思っただわ」

健二「生きてた!？」

慎吾「勿論さ」

康太郎「最前車両へ行こう」

崇「待て!!」

畏かもしれない」

康太郎「へっ？」

楓「どう言う事ですか？」

崇「まともに行けるはずないだろう？」

和美「あ……っ」

崇「車掌も前へ行こうとして死んだろ？」

慎吾「確かに」

そつえばそうだ。

車掌さんもやられたのだ。

自分に行きたくない。

でも行くしかない。

健二「あ……。」

崇「何だ？」

健二「まともにつ込んだらやばいなら360°見張ればどうです？」

崇「つと言うと？」

健二「前、後ろ、右、左、上」

慎吾「バカかお前」

健二「それしか方法が無いだろ？」

慎吾「そんなことしてたら前に進まない

地獄行きだ」

崇「いや、結構ありかもしれない」

康太郎「そうだな

それで行こう」

ガラガラ

慎吾「何だこりゃ？」

康太郎「化け物だらけじゃね〜か」

そこに飛び込んできた光景は何と化け物しか居なかった。

崇「行くしかないな」

和美「ええ……」

シュツ

シュツ

シュツ

楓「多いですね」

慎吾「刃が持たないぞ」

康太郎「刃ならある」

和美「わっ!!」

シュツ

シュツ

シュツ

ガラガラ

崇「ここは2両目か・・・」

楓「後5両ですね」

康太郎「行くぞ」

ガシャーン

健二「出た!!」

シュツ

シュツ

シュツ

シュツ

シュツ

ガシャーン

慎吾「また逃げた」

康太郎「また来るかもしれないな」

ここまで何分だ・・・。

いや1時間も経ってない。

本当に脱出出来るだろうか。

みんなで脱出できるだろうか・・・。

化け物（後書き）

んゝ結構間を開けよう・・・。

楓の暴走（前書き）

久しぶりの投稿です

楓の暴走

だいが化け物が少なくなってきた
そう思った瞬間

楓「何これ」

スツ

ピカー

楓「きゃーーーーーー」

健二「楓さん？」

シュツ

健二「ひっ？」

楓さんがぼくに攻撃をしてきた？

どうなってる

康太郎「ダメだ

下手に近づけない？」

和美「健二君

楓さんの胸に何かついてる」

健二「えっ？」

確かに楓さんの胸に変なものが付いてる

健二「康太郎さん

楓さんの胸についてるものを狙って？」

康太郎「何だと？

馬鹿言っつな？」

崇「それに掛けるしかない」

慎吾「よっしゃー

やるっぜ？」

楓「うわー？」

キン

康太郎「ちっ」

カン

アンビルト「無駄だ」

康太郎「うるせー」

アンビルト「じゃあ死ぬまでだ」

その時だった

僕の頭の中に僕が現れた

影「ホントはどうでもいいんだろ？」

健二「うるさい」

影「自分に正直に成れよ」

健二「黙れ」

影「自分だけが助かればいいんだろ？」

健二「そんなことない」

影「いや有るね」

ぼくは君なんだから」

健二「何だよそれ」

影「じゃあ知りたいたいなら

死ね」

健二「何だよそれ」

影「シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ」

健二「やめる」

康太郎「取れたぞ？」

楓「私はいつたい？」

影「次は死んでもらうよ」

慎吾「おい健二」

健二「はっ!?!？」

慎吾「行くぞ」

健二「うん」

ぼくはその時思った

あれはぼくの影

あの影の言つとおりぼくはどうでもよかつたかもしれない

それならばくはあいつが言つとおり死んだらよかつたかもしれない
そんなことを考えながら最前車両の扉の前まで来た

慎吾「ここか……」

康太郎「行くか……」

楓「行くしかないですね……」

崇「そのようだな」

和美「でも中から変な音が」

慎吾「へっとうってことないぜ」

今度は自分に負けない

絶対に現代に勝つ

そして自分の影に勝つ

楓の暴走（後書き）

んゝ次号で最終回ですね？
気合を入れて行きましょう？

最終ボス（前書き）

最終回です。

よろしくお願ひします。

最終ボス

7 両目の扉に差し掛かった。
扉を何故か開けない。

この感情は何だ？

楓「どうしたの？」

健二「何か……。開けない……。。」

崇「怖いかな？」

健二「そうじゃなくて……。。」

慎吾「ああ、イライラする？」

ガラ

康太郎「居た？」

アンビルト「よく来たな

人間ども」

和美「あなたたち一体何なの？」

アンビルト「これは私が作り出した感情だ？」

康太郎「それに俺たちを巻き込んだのか？」

アンビルト「ああ

人間は嘘をつく

だからだ

私は嘘付きが嫌いなんだよ」

慎吾「ふざけんなよ

それで俺たちを巻き込んだのか？」

アンビルト「そうさ」

和美「私たちは関係ないでしょ？」

健二「そうだ？」

アンビルト「やはりお前たちは失格だ

行くぞ？

うおーーーーーっ？」

アンビルトが変身した？

慎吾「こいつを倒せばいいんだな？」

崇「行くぞ？」

楓「うん？」

シュツ

シュツ

アンビルト「無駄な抵抗だ？」

康太郎「うるせー？」

和美「うわ？」

健二「宮田さん？」

和美「大丈夫？」

シュツ

シュツ

シュツ

アンビルト「うっ？」

バタ

崇「やったか？」

スク

アンビルト「ふふふ

キミたちには負けたよ・・・。

約束通り元の世界へ戻してやる」

慎吾「お前は一体何が目的だったんだ？」

アンビルト「私は高校教師をしていたんだ

そしたらある日生徒に『放課後来てください』って言われたんだ

そしたら生徒たちに殺されたんだ・・・。

その学校の名前が大和工業高校だ？」

健二「？」

まさか・・・。

伊勢崎先生？」

アンビルト「そうだ

さあ元の世界へ戻りな」

ヒューン

ガタンガタン

和美「戻ってこれた……」

慎吾「ああ……」

健二「うん……」

和美「よかったね……」

健二「でもさ、伊勢崎先生の言ったたこと間違ってる気がする」

慎吾「え？」

和美「何のこと？」

健二「『嘘付きは嫌い』って言ってたじゃん

でもそれはぼくたちは関係ない気がする……」

和美「そうかもね……」

アナウンス「高村、高村

お忘れ物の無いようにお降りください」

慎吾「お、駅だ

じゃあな健二」

健二「うんまた明日」

プシュー

ガタンガタン

和美「ねえ健二君」

健二「何？」

和美「今度どっかに遊びに行かない？」

慎吾君も連れてさ」

健二「いいねえ」

アナウンス「神山、神山

お忘れ物の無いようにお降りください」

健二「お、駅じゃん

降りようか？」

和美「うん」

ガヤガヤ

健二「じゃあまたメールするね」

和美「うん

バイバイ」

そうだ

ぼくは終わってないんだ？

まだまだ長い人生が有るじゃん？

それでいいじゃん

宮田さんとも遊びに行く約束したし？

健二「ただいま」

ニュース「次のニュースです

先週大和工業高校の教師が殺された事件についてです

殺したとみられる生徒4人を大和警察署が逮捕しました

4人は容疑を認めています」

伊勢崎先生を殺した奴も捕まったじゃん

よかった、よかった、本当によかった。

END

最終ボス（後書き）

こんにちは

作者の2代目妖狐です。

完結しました？

ここまで長かったです？

では次の作品までさよならー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0218v/>

電車事件

2011年11月18日01時42分発行